

源氏物語

明石

紫式部

青空文庫

わりなくもわかれがたしとしら玉の涙

をながす琴のいとかな

(晶子)

まだ雨風はやまないし、雷鳴が始終することも同じで幾日かたつた。今は極度に侘^{わび}しい須磨^{すま}の人たちであつた。今日までのことも明日からのことも心細いことばかりで、源氏も冷静にはしていられなかつた。どうすればいいであろう、京へ帰ることもまだ免職になつたままで本官に復したわけでもなんでもないのであるから見苦しい結果を生むことになるであろうし、まだもつと深い山のほうへはいつてしまうことも波風に威嚇^{いかく}されて恐怖した行為だ

と人に見られ、後世に誤られることも堪えられないことであるからと源氏は煩悶はんもんしていた。このごろの夢は怪しい者が来て誘おうとする初めの夜に見たのと同じ夢ばかりであった。幾日も雲の切れ目がないような空ばかりをながめて暮らしていると京のことも気がかりになって、自分という者はこうした心細い中で死んで行くのかと源氏は思われるのであるが、首だけでも外へ出すことのできない天気であったから京へ使いの出しようもない。二条の院のほうからその中を人が来た。濡れ鼠ぬねずみになった使いである。雨具で何重にも身を固めているから、途中で行き逢つても人間か何かわからぬ形をした、まず奇怪な者として追ひ払わなければならぬ下侍に親しみを感じる点だけでも、自分はみじめな者になつ

たと源氏はみずから思われた。夫人の手紙は、

申しようのない長雨は空までもなくしてしまふのではないかと
いう気がしまして須磨の方角をながめることもできません。

浦風やいかに吹くらん思ひやる袖うち濡らし波間なき頃

というような身にしむことが数々書かれてある。開封した時か
らもう源氏の涙は潮しおどき時が来たような勢いで、内から湧わき上がっ
てくる気がしたものであつた。

「京でもこの雨風は天変だと申して、なんらかを暗示するものだ
と解釈しておられるようでございます。仁王にんおうえ会を宮中であそば

すようなことも承っております。大官方が参内さんだいもできないので
ございますから、政治も雨風のために中止の形でございます」

こんな話を、はかばかしくもなく下士級の頭で理解しているだ
けのことを言うのであるが、京のことに無関心でありえない源氏
は、居間の近くへその男を呼び出していろいろな質問を試みた。
「ただ例のような雨が少しの絶え間もなく降っております、そ
の中に風も時々吹き出すというような日が幾日も続くのでござい
ますから、それで皆様の御心配が始まったものだと思じます。今
度のように地の底までも通るような荒い雹ひょうが降ったり、雷鳴の静
まらないことはこれまでにないことでございます」

などと言う男の表情にも深刻な恐怖の色の見えるのも源氏をよ

り心細くさせた。

こんなことでこの世は滅んでいくのではないかと源氏は思っていたが、その翌日からまた大風が吹いて、海潮が満ち、高く立つ波の音は岩も山も崩くずしてしまふように響いた。雷鳴と電光のさすことの烈はげしくなつたことは想像もできないほどである。この家へ雷が落ちそうにも近く鳴つた。もう理り智ちで物を見る人もなくなつていた。

「私はどんな罪を前生で犯してこうした悲しい目に逢あうのだろう。親たちにも逢えずかわい妻子の顔も見ずに死なねばならぬとは」
 こんなふうと言つて歎く者がある。源氏は心を静めて、自分にはこの寂しい海辺で命を落とさねばならぬ罪ざい業ごうはないわけであ

ると自信するのであるが、ともかくも異常である天候のためにはいろいろの幣へいはく帛を神にささげて祈るほかがなかつた。

「住すみよし吉の神、この付近の悪天候をお鎮しずめください。眞実すいじや垂す跡くの神でおいでになるのでしたら慈悲そのものであなたはいらつしやるはずですから」

と源氏は言つて多くの大願を立てた。惟これみつ光よしきよや良清よしきよらは、自

身たちの命はともかくも源氏のような人が未曾みぞう有な不幸に終わつてしまうことが大きな悲しみであることから、氣を引き立てて、少し人心地ひとごころのする者は皆命に代えて源氏を救おうと一所懸命になつた。彼らは聲を合せて仏神に祈るのであつた。

「帝王の深宮に育ちたまい、もろもろの歡樂おほこに驕おごりたまいしが、

絶大の愛を心に持ちたまひ、慈悲をあまねく日本国じゆうに垂たれたまひ、不幸なる者を救いたまへること数を知らず、今何の報いにて風波の牲にえとなりたまわん。この理を明らかにさせたまへ。罪なくして罪に当たり、官位を剥奪はくだつされ、家を離れ、故郷を捨て、朝暮歎きに沈淪ちんりんしたもう。今またかかる悲しみを見て命の尽きなんとするは何事によるか、前生の報いか、この世の犯しか、神仏、明らかにましまさばこの憂うれいを息やすめたまへ」

住吉すみよしの御社みやしろのほうへ向いてこう叫ぶ人々はさまざまの願を立てた。また竜りゆうおう王をはじめ大海の諸神にも源氏は願を立てた。いよいよ雷鳴ははげしくとどろいて源氏の居間に続いた廊へ落雷した。火が燃え上がって廊は焼けていく。人々は心きこも肝きもも皆失つ

たようになつていた。後ろのほうの廚くりやその他に使つてゐる建物のほうへ源氏を移転させ、上下の者が皆いつしよにいて泣く声は一つの大きな音響を作つて雷鳴にも劣らないのである。空は墨を磨すつたように黒くなつて日も暮れた。そのうち風が穏やかになり、雨が小降りになつて星の光も見えてきた。そうなるこの人々は源氏の居場所があまりにもつたいなく思われて、寢殿のほうへ席を移そうとしたが、そこも焼け残つた建物がすさまじく見え、座敷は多数の人間が逃げまわつた時に踏みしだかれてあるし、御簾みすなども皆風に吹き落とされていた。今夜夜通しに後始末あとしまつをしてからのことに決めて、皆がそんなことに奔走している時、源氏はしんぎよう心経を唱えながら、静かに考えてみるとあわたましい一日で

あつた。月が出てきて海潮の寄せた跡が顕あらわにながめられる。遠く退のいてもまだ寄せ返しする浪なみの荒い海へのほうを戸をあけて源氏はながめていた。今日までのこと明日からのことを意識して、対策を講じ合うに足るような人は近い世界に絶無であると源氏は感じた。漁村の住民たちが貴人の居所を気にかけて、集まつて来て訳のわからぬ言葉でしゃべり合っているのも礼儀のないことであるが、それを追い払う者すらない。

「あの大風がもうしばらくやまなかつたら、潮はもつと遠くへま
で上つて、この辺なども形を残してしまい。やはり神様のお助け
じゃ」

こんなことの言われているのも聞く身にとっては非常に心細い

ことであつた。

海にます神のたすけにかからずば潮の八百会やほあひにさすらへなま
し

と源氏は口にした。終日風の揉もみ抜いた家にいたのであるから、源氏も疲労して思わず眠つた。ひどい場所であつたから、横になつたのではなく、ただ物によりかかつて見る夢に、お亡なくなりになつた院がはいつておいでになつたかと思うと、すぐそこへお立ちになつて、

「どうしてこんなひどい所にいるか」

こうお言いになりながら、源氏の手を取って引き立てようとあそばされる。

「住吉の神が導いてくださるのについて、早くこの浦を去つてしま方がよい」

と仰せられる。源氏はうれしくて、

「陛下とお別れいたしましたからは、いろいろと悲しいことばかりがございますから私はもうこの海岸で死のうかと思ひます」

「とんでもない。これはね、ただおまえが受けるちよつとしたこととの報いにすぎないのだ。私は位にいる間に過失もなかつたつもりであつたが、犯した罪があつて、その罪の贖つぐないをする間は忙せわしくてこの世を顧みる暇がなかつたのだが、おまえが非常に不幸で、

悲しんでいるのを見ると堪えられなくて、海の中を来たり、海べを通つたりまつたく困つたがやつとここまで来ることができた。

このついでに陛下へ申し上げることがあるから、すぐに京へ行く」と仰せになつてそのまま行つておしまいになろうとした。源氏は悲しくて、

「私もお供してまいります」

と泣き入つて、父帝のお顔を見上げようとした時に、人は見えないで、月の顔だけがきらきらとして前にあつた。源氏は夢とは思われないで、まだ名残なごりがそこらに漂つているように思われた。空の雲が身にしむように動いてもいるのである。長い間夢の中で見ることもできなかつた恋しい父帝をしばらくだけではあつたが

明めいりよう 瞭りよう

に見ることのできた、そのお顔が面影に見えて、自分がこんなふう不幸の底に落ちて、生命いのちも危うくなつたのを、助けるために遠い世界からおいでになつたのであろうと思うと、よくあの騒ぎがあつたことであると、こんなことを源氏は思うようになった。なんとなく力がついてきた。その時は胸がはつとした思いでいっぱいになって、現実の悲しいことも皆忘れていたが、夢の中でももう少しお話をすればよかつたと飽き足らぬ氣のする源氏は、もう一度続きの夢が見られるかとわざわざ寝入ろうとしたが、眠りえないままで夜明けになつた。

渚なぎさのほうに小さな船を寄せて、二、三人が源氏の家のほうへ歩いて来た。だれかと山荘の者が問うてみると、明石あかしの浦さきのから前

はりまのかみ
播磨守入道が船で訪ねて来ていて、その使いとして来た者であつた。

「源少納言げんさんがいられましたら、お目にかかつて、お訪ねいたしました理由を申し上げます」

と使いは入道の言葉を述べた。驚いていた良清よしきよは、

「入道は播磨での知人で、ずっと以前から知っておりますが、私との間には双方で感情の害されていることがあつて、格別に交つきあ際いをしなくなっております。それが風波の害のあつた際に何を言つて来たのでしよう」

と言つて訳がわからないふうであつた。源氏は昨夜の夢のことが胸中にあつて、

「早く逢あつてやれ」

と言つたので、良清よしきよは船へ行つて入道に面会した。あんなにはげしい天気のとどろいて船が出されたのであろうと良清はまず不思議に思つた。

「この月一日の夜に見ました夢で異形いぎようの者からお告げを受けたのです。信じがたいこととは思いましたが、十三日が来れば明瞭になる、船の仕度したくをしておいて、必ず雨風がやんだら須磨の源氏の君の住居すまいへ行けというようなお告げがありましたから、試みに船の用意をして待つていますと、たいへんな雨風でしょう、そして雷でしょう、支那しななどでも夢の告げを信じてそれで国難を救うことができたりした例もあるのですから、こちら様ではお信じに

ならなくても、示しのあつた十三日にはこちらへ伺つてお話だけは申し上げようと思ひまして、船を出してみますと、特別なような風が細く、私の船だけを吹き送つてくれますような風でこちらへ着きました。やはり神様の御案内だつたと思ひます。何かこちらでも神の告げというようなことがなかつたでしょうかと申すことを失礼ですがあなたからお取り次ぎくださいませんか」

と入道は言うのである。良清はそつと源氏へこのことを伝えた。

源氏は夢も現実も静かでなく、何かの暗示らしい点の多かつたことを思つて、世間の譏そしりなどばかりを気にかけて神の冥みよ助じよにそむくことをすれば、またこれ以上の苦しみを見る日が来るであろう、人間を怒らせることすら結果は相当に恐ろしいのである、気

の進まぬことも自分より年長者であつたり、上の地位にいる人の言葉には随したがうべきである。退いて咎とがなしと昔の賢人も言った、あくまで謙遜けんそんであるべきである。もう自分は生命いのちの危あぶないほどの目を幾つも見せられた、臆おくびよう病であつたと言われることを不名誉だと考える必要もない。夢の中でも父帝は住すみよし吉の神のことを仰せられたのであるから、疑うことは一つも残つていないと思つて、源氏は明石へ居を移す決心をして、入道へ返辞を伝えさせた。

「知るべのない所へ来まして、いろいろな災厄さいやくにあつていまして、京のほうからは見舞いを言い送つてくれる者もありませんから、ただ大空の月日だけを昔馴染なじみのものと思つてながめているのですが、今日船を私のために寄せてくださつてありがたく思い

ます。明石には私の隠栖いんせいに適した場所があるでしようか」

入道は申し入れの受けられたことを非常によろこんで、恐縮の意を表してきた。ともかく夜が明けきらぬうちに船へお乗りになるがよいということになって、例の四、五人だけが源氏を護まもつて乗船した。入道の話のような清い涼しい風が吹いて来て、船は飛ぶように明石へ着いた。それはほんの短い時間のことであつたが不思議な海上の氣であつた。

明石の浦の風光は、源氏がかねて聞いていたように美しかった。ただ須磨に比べて住む人間の多いことだけが源氏の本意に反したことのようである。入道の持つている土地は広くて、海岸のほうにも、山手のほうにも大きな邸宅なぎさがあつた。渚しやうてには風流な小

亭いが作つてあり、山手のほうには、けいりゆう溪流に沿つた場所に、
入道がこもつて後世ごせの祈りをする三昧堂さんまいどうがあつて、老後のため
に蓄積してある財物のための倉庫町もある。高潮を恐れてこのご
ろは娘その他の家族は山手の家のほうに移らせてあつたから、浜
のほうの本邸に源氏一行は氣樂に住んでいることができるのであ
つた。船から車に乗り移るころにようやく朝日が上つて、ほのか
に見ることのできた源氏びぼうの美貌びぼうに入道は老いを忘れることもでき、
命も延びる気がした。満面に笑みえを見せてまず住吉の神をはるか
に拝んだ。月と日てのひらを掌てのひらの中に得たような喜びをして、入道が源氏
を大事がるのはもつともなことである。おのずから風景めいびの明媚めいびな
土地に、林泉の美が巧みに加えられた庭が座敷の周囲にあつた。

入り江の水の姿の趣などは想像力の乏しい画家には描^かけないであろうと思われた。須磨の家には比べるとここは非常に明るくて朗らかであった。座敷の中の設備にも華奢^{かしや}が尽くされてあつた。生活ぶりは都の大貴族と少しも変わっていないのである。それよりもまだ派手^{はで}なところが見えないでもない。

明石へ移つて来た初めの落ち着かぬ心が少しなおつてから、源氏は京へ手紙を書いた。

「こんなことにならうとは知らずに来て、ここで死ぬ運命だつた」などと言つて、悲しんでいた京の使いが須磨にまだいたのを呼んで、過分な物を報酬に与えた上で、京でするいろいろの用が命ぜられた。頼みつけの祈りの僧たちや寺々へはこの間からのこと

が言いやられ、新たな祈りが依頼されたのである。私人には入道の宮へだけ、稀有けうにして命をまつとうした須磨の生活の終わりを源氏はお知らせした。二条の院の憐あわれな手紙の返事は一気には書かれずに、一章を書いては泣き一章を書いては涙を拭ふきして書いている様子にも源氏がその人を思う深さが見られるのであった。

あとへあとへと悲しいことが起こってきて、もう苦しい経験はし尽くしたような私ですからしきりに出家したい心も湧わきますが、鏡を見てもとお言いになったあなたの面影が目を離れないのですから、あなたに再会をしないでは、それを実行することもできません。何の苦しみよりも私にはあなたと離れている苦痛が最もつらいことに思われます。あなたにまた逢うことがで

きれば、ほかのいとわしいことは皆忍んでいこうと思ひます。

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦より遠をちに浦づたひして

まだ夢の続きで、明石の浦にまで来ているような気がしてなりません。こんな時に書く手紙はまちがったこともあるでしょうが許してください。

正しくは書かれずに乱れ書きになっているような美しい手紙を、横から見ていて、源氏が二条の院の夫人を愛する深さを惟これみつ光たちは思つた。そうした人たちもわが家への音信をこの使いへ託した。あの晴れ間もないようだった天気は名残なごりなく晴れて、明石の

浦の空は澄み返っていた。ここの漁業をする人たちは得意そうだった。須磨は寂しく静かで、漁師の家もまばらにしかなかったのである。最初ここへ来た時にはそれと変わった漁村のにぎやかに見えるのを、いとわしく思った源氏も、ここにはまた特殊ないろいろのよさのあるのが、発見されていつて慰んでいた。

主人あるじの入道は信仰生活をする精神的な人物で、俗気ぞっけのない愛すべき男であるが、溺できあい愛する一人娘のことでは、源氏の迷惑に思うことを知らずに、注意を引こうとする言葉もおりおり洩もらすのである。源氏もかねて興味を持って噂うわさを聞いていた女であったから、こんな意外な土地へ来ることになったのは、その人との前生の縁に引き寄せられているのではないかとも思うことはあるが、

こうした境遇にいる間は仏勤め以外のことに心をつかうまい。京の女王によおうに聞かれてもやましくない生活をしているのとは違つて、そうなれば誓つてきたことも皆嘘うそにとられるのが恥ずかしいと思つて、入道の娘に求婚的な態度をとるようなことは絶対にしなかつた。何かのことに触れては平凡な娘ではなさそうであると心の動いて行くことはないのではなかつた。源氏のいる所へは入道自身すら遠慮をしてあまり近づいて来ない。ずっと離れた仮屋建てのほうに詰めきつていた。心の中では美しい源氏を始終見ていたくてならないのである。ぜひ希望することを実現させたいと思つて、いよいよ仏神を念じていた。年は六十くらいであるがきれいな老人で、仏勤めに瘦やせて、もとの身柄のよいせいであるか、頑が

固^{んこ}な、そしてまた老いぼけたようなところもありながら、古典的な趣味がわかつていて感じはきわめてよい。素養も相当にあることが何かの場合に見えるので、若い時に見聞したことを語らせて聞くことで源氏のつれづれさも紛れることがあった。昔から公人として、私人として少しの閑暇^{ひま}もない生活をしていた源氏であったから、古い時代にあつた実話などをぼつぼつと少しずつ話してくれる老人のあることは珍重すべきであると思つた。この人に逢わなかつたら歴史の裏面にあつたようなことはわからないでしまつたかもしれぬとまでおもしろく思われることも話の中にはあつた。こんなふうで入道は源氏に親しく扱われているのであるが、この気^け高^{だけ}い貴人^かに対しては、以前はあんなに独^{ひと}り決^けめをしていた

入道ではあつても、無遠慮に娘の婿になつてほしいなどは言い出せないのを、自身で齒がゆく思つては妻と二人で歎なげいていた。

娘自身も並み並みの男さえも見ることの稀まれな田舎いなかに育つて、源氏

を隙見すきみした時から、こんな美貌びぼうを持つ人もこの世にはいるのであ

つたかと驚きょう歎たんはしたが、それによつていよいよ自身とその人

との懸隔けんかくを明瞭めいりょうに悟ることになつて、恋愛の対象などにす

べきでないと思つていた。親たちが熱心にその成立を祈つているのを見聞きしては、不似合いなことを思うものであると見ているのであるが、それとともに低い身のほどの悲しみを覚え始めた。

四月になつた。衣がえの衣服、美しい夏の帳とばりなどを入道は自家で調製した。よけいなことをするものであるとも源氏は思うので

あるが、入道の思い上がった人品に対しては何とも言えなかつた。京からも始終そうした品物が届けられるのである。のどかな初夏の夕月夜に海上が広く明るく見渡される所において、源氏はこれを二条の院の月夜の池のように思われた。恋しい紫の女によおう王がいるはずでいてその人の影すらもない。ただ目の前にあるのは淡路あわじの島であつた。「泡あわとはるかに見し月の」などと源氏は口ずさんでいた。

泡と見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

と歌ってから、源氏は久しく触れなかつた琴を袋から出して、

はかないふうに弾ひいていた。惟これみつ光たちも源氏の心中を察して悲しんでいた。源氏は「広こうりよう陵」という曲を細やかに弾いているのであった。山手の家のほうへも松風と波の音に混じって聞こえてくる琴の音に若い女性たちは身にしむ思いを味わったことであろうと思われる。名手の弾く琴も何も聞き分けえられそうにない土地の老人たちも、思わず外へとび出して来て浜風を引き歩いた。入道も供養法を修していたが、中止することにして、急いで源氏の居間へ来た。

「私は捨てた世の中がまた恋しくなるのではないかと思われますほど、あなた様の琴の音で昔が思い出されます。また死後に参りたいと願っております世界もこんなのではないかという気もいた

される夜でございます」

入道は泣く泣くほめたたえていた。源氏自身も心に、おりおりの宮中の音楽の催し、その時のだれの琴、だれの笛、歌手を勤めた人の歌いぶり、いろいろ時々につけて自身の芸のもてはやされたこと、帝をはじめとして音楽の天才として周囲から自身に尊敬の寄せられたことなどについての追憶がこもごも起こってきて、今日は見がたい他の人も、不運な自身の今も深く思えば夢のような気ばかりがして、深刻な愁いうれを感じながら弾いているのであったから、すごい音楽といつてよいものであった。老人は涙を流しながら、山手の家から琵琶びわと十三絃げんの琴を取り寄せて、入道は琵琶法師然とした姿で、おもしろくて珍しい手の一つ二つ弾いた。

十三絃を源氏の前に置くと源氏はそれも少し弾いた。また入道は敬服してしまった。あまり上手じょうずがする音楽でなくても場所場所で感じ深く思われることの多いものであるから、これははるかに広い月夜の海を前にして春秋の花紅葉もみじの盛りに劣らないいろいろの木如若葉がそこここに盛り上がっていて、そのまた陰影の地に落ちたところなどに水鶏くいなが戸をたたく音に似た声で鳴いているのもおもしろい庭も控えたこうした所で、優秀な楽器に対していることに源氏は興味を覚えて、

「この十三絃という物は、女が柔らかみをもつてあまり定きまらな
いふうに弾いたのが、おもしろくていいのです」

などと言っていた。源氏の意はただおおまかに女ということ

あつたが、入道は訳もなくうれしい言葉を聞きつけたように、笑みながら言う、

「あなた様があそばす以上におもしろい音を出しうるものがどこにございましょう。私は延喜えんぎの聖帝から伝わりまして三代目の芸を継いだ者でございしますが、不運な私は俗界のこととともに音楽もいったんは捨ててしまつたのでございしましたが、憂鬱ゆううつな気分になつております時などに時々弾いておりますのを、聞き覚えて弾きます子供が、どうしたのでございしますか私の祖父の親王によく似た音を出します。それは法師の僻耳ひがみみで、松風の音をそう感じていられるのかもしれませんが、一度お聞きに入りたいものでございす」

興奮して慄ふるえている入道は涙もこぼしているようである。

「松風が邪魔じやまをしそうな所で、よくそんなにお稽古けいこができたものですね、うらやましいことですよ」

源氏は琴を前へ押しやりながらまた言葉を続けた。

「不思議に昔から十三絃の琴には女の名手が多いようです。嵯峨さが帝のお伝えで女五によごの宮みやが名人でおありになったそうですが、その芸の系統は取り立てて続いていると思われ人が見受けられない。現在の上手じょうずというのは、ただちよつとその場きりな巧みさだけしかないようですが、ほんとうの上手がこんな所に隠されているとはおもしろいことですね。ぜひお嬢さんのを聞かせていただきたいものです」

「お聞きくださいますのに何の御遠慮もいることではございません。おそばへお召しになりましたも済むことでございます。潯じんよ陽江うこうでは商人のためにも名曲をかなでる人があったのでござい
ますから。そのまた琵琶と申す物はやっかいなものでござい
まして、昔にもあまり琵琶の名人という者はなかつたよう
でござい
ますが、これも宅の娘はかなりすらすらと弾きこなします。品のよ
い手筋が見えるのでございます。どうしてその域に達しましたか。
娘のそうした芸をただ荒い波の音が合奏してくるばかりの所へ置
きますことは私として悲しいことに違いございませんが、不快な
ことのあるたりいたします節にはそれを聞いて心の慰めにいたす
こともござい
ます」

音楽通の自信があるような入道の言葉を、源氏はおもしろく思
つて、今度は十三絃を入道に与えて弾かせた。實際入道はくろうと玄人
らしく弾く。現代では聞けないような手も出てきた。弾く指の運
びに唐風が多く混じっているのである。左手でおさええて出す音な
どはことに深く出される。ここは伊勢いせの海ではないが「清き渚なぎさに
貝や拾はん」という催馬樂さいばらを美音の者に歌わせて、源氏自身も時
々拍子を取り、声を添えることがあると、入道は琴を弾きながら
それをほめていた。珍しいふうに作られた菓子も席上に出て、人
々には酒も勧められるのであったから、だれの旅愁も今夜は紛れ
てしまいそうであつた。夜がふけて浜の風が涼しくなつた。落ち
ようとすする月が明るくなつて、また静かな時に、入道は過去から

現在までの身の上話をしだした。明石へ来たところに苦勞のあつたこと、出家を遂げた経路などを語る。娘のことも問わず語りにする。源氏はおかしくもあるが、さすがに身にしむ節ふしもあるのであつた。

「申し上げにくいことではございますが、あなた様が思いがけなくこの土地へ、仮にもせよ移つておいでになることになりましたのは、もしかいたしますと、長年の間老いた法師がお祈りいたしております神や仏が憐あわれみを一家におかけくださいます、それでしばらくこの僻地へきちへあなた様がおいでになつたのではないかと思われます。その理由は住吉の神をお頼み申すことになりまして十八年になるのでございます。女の子の小さい時から私は特別なお

願いを起こしまして、毎年の春秋に子供を住吉へ参詣さんけいさせることにいたしております。また昼夜に六回の仏前のお勤めをいたしますのにも自分の極樂往生はさしおいて私はただこの子によい配偶者を与えたまえと祈っております。私自身は前生の因縁が悪くて、こんな地方人に成り下がっておりますも、親は大臣にもなつた人でございます。自分はこの地位に甘んじていましても子はまたこれに準じたほどの者にしかなれませんでは、孫、曾孫そうそんの末は何になることであろうと悲しんでおりましたが、この娘は小さい時から親に希望を持たせてくれました。どうかして京の貴人に娶めとつていただきたいと思えます心から、私どもと同じ階級の者の間に反感を買い、敵を作りましたし、つらい目にもあわされま

したが、私はそんなことを何とも思っておりません。命のある限りは微力でも親が保護をしよう、結婚をさせないままで親が死ぬば海へでも身を投げてしまえと私は遺言がしてございます」

などと書き尽くせないほどのことを泣く泣く言うのであった。

源氏も涙ぐみながら聞いていた。

「冤罪えんざいのために、思いも寄らぬ国へ漂泊さまよつて来ていますことを、

前生に犯したどんな罪によつてであるかとわからなく思っておりましたが、今晚のお話で考え合わせますと、深い因縁によつてのことだったとはじめて気がつかれます。なぜ明瞭にわかつておいでになったあなたが早く言つてくださらなかつたのでしよう。京を出ました時から私はもう無常の世が悲しくて、信仰のこと以外

には何も思わずに時を送っていました。いつかそれが習慣になつて、若い男らしい望みも何もなくなつておりました。今お話のようなお嬢さんのいられるということだけは聞いていましたが、罪人にされている私を不吉にお思ひになるだろうと思ひまして希望もかけなかつたのですが、それではお許しくださるのですね、心細い独り^{ひと}住みの心が慰められることでしょう」

などと源氏の言つてくれるのを入道は非常に喜んでいた。

「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうら寂しさを

私はまた長い間口へ出してお願ひすることができませんで悶^{もんも}々^んとしておりました」

こう言うのに身は慄^{ふる}わせているが、さすがに上品なところはあつた。

「寂しいと言つてもあなたはもう法師生活に慣れていらつしやるのですから」

それから、

旅衣うら悲しさにあかしかね草の枕^{まくら}は夢も結ばず

戯^{じょうだん}談 まじりに言う、源氏にはまた平生入道の知らない愛^{あい}き

嬌ようが見えた。入道はなおいろいろと娘について言っていたが、読者はうるさいであろうから省いておく。まちがつて書けばいつそう非常識な入道に見えるであろうから。

やつと思いがかなった気がして、涼しい心に入道はなっていた。その翌日の昼ごろに源氏は山手の家へ手紙を持たせてやることにした。ある見識をもつ娘らしい、かえつてこんなところに意外なすぐれた女がいるのかもしれないからと思つて、心づかいをしなから手紙を書いた。朝鮮紙の胡桃くるみ色のものへきれいな字で書いた。

遠をちこち近なもしらぬ雲井なに眺ながめわびかすめし宿こすの梢ずをぞとふ

思うには。(思ふには忍ぶることぞ負けにける色に出^いでじと思ひしものを)

こんなものであつたようである。人知れずこの音信を待つために山手の家へ来ていた入道は、予期どおりに送られた手紙の使いを大騒ぎしてもてなした。娘は返事を容易に書かなかつた。娘の居間へはいつて行つて勧めても娘は父の言葉を聞き入れない。返事を書くのを恥ずかしくきまり悪く思われるのといつしよに、源氏の身分、自己の身分の比較される悲しみを心に持つて、気分が悪いと言つて横になつてしまつた。これ以上勧められなくなつて入道は自身で返事を書いた。

もつたいないお手紙を得ましたことで、過分な幸福をどう処置

してよいかわからぬふうでございます。

それをこんなふうには私は見るのでございます。

眺むらん同じ雲井を眺むるは思ひも同じ思ひなるらん

だろうと私には思われます。柄にもない風流氣を私の出しましたことをお許しく下さい。

とあつた。檀紙に古風ではあるが書き方に一つの風格のある字で書かれてあつた。なるほど風流氣を出したものであると源氏は入道进行、返事を書かぬ娘には軽い反感が起こつた。使いはたしいした贈り物を得て来たのである。翌日また源氏は書いた。

代筆のお返事などは必要がありません。

と書いて、

いぶせくも心に物を思ふかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言うことを許されないのですから。

今度のは柔らかい薄うすよう様へはなやかに書いてやった。若い女がこれを不感覚に見てしまったと思われるのは残念であるが、その人は尊敬してもつりあわぬ女であることを痛切に覚える自分を、さも相手らしく認めて手紙の送られることに涙ぐまれて返事を書く気に娘はならないのを、入道に責められて、香のにおいの沁しん

だ紫の紙に、字を濃く淡くして紛らすようにして娘は書いた。

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか悩まん

手も書き方も京の貴女きじよにあまり劣らないほど上手じょうずであつた。

こんな女の手紙を見ていると京の生活が思い出されて源氏の心は楽しかったが、続いて毎日手紙をやることも人目がうるさかったから、二、三日置きくらいに、寂しい夕方とか、物哀れな氣のする夜明けとかに書いてはそつと送っていた。あちらからも返事は来た。相手をするに不足のない思い上がった娘であることがわかつてきて、源氏の心は自然惹ひかれていくのであるが、良清よしきよが自

身の繩張りなわばの中であるように言っていた女であつたから、今眼前
 横取りする形になることは彼にかわいそうであるとなお躊躇ちゆうちよ
 はされた。あちらから積極的な態度をとってくれば良清への責任
 も少なくなるわけであるからと、そんなことも源氏は期待してい
 たが女のほうは貴女と言われる階級の女以上に思い上がった性質
 であつたから、自分を卑しくして源氏に接近しようなどは夢に
 も思わないのである。結局どちらが負けるかわからない。何ほど
 も遠くなつてはいないのであるが、ともかくも須磨の関が中にあ
 ることになつてからは、京の女王がいつそう恋しくて、どうすれ
 ばいいことであろう、短期間の別れであるとも思つて捨てて来た
 ことが残念で、そつとここへ迎えることを実現させてみようかと

時々は思うのではあるが、しかしもうこの境遇に置かれていることも先の長いことと思われない今になって、世間体のよろしくないことはやはり忍ぶほうがよいのであるとして、源氏はしいて恋しさをおさえていた。

この年は日本に天変地異ともいうべきことがいくつも現われてきた。三月十三日の雷雨の烈はげしかった夜、帝みかどの御夢に先帝が清涼殿の階きざし段の所へお立ちになって、非常に御機嫌ごきげんの悪い顔つきでおにらみになったので、帝がかしこまっておいでになると、先帝からはいろいろの仰せがあつた。それは多く源氏のことおほしめが申されたりしい。おさめになったあとで帝は恐ろしく思召おほしめした。また御子として、他界におわしましてなお御心労を負わせられること

が堪えられないことであると悲しく思召した。太后へお話しになると、

「雨などが降って、天氣の荒れている夜などというものは、平生神経を悩ましていることが悪夢にもなつて見えるものですから、それに動かされたと外へ見えるようなことはなさらないほうがよい。軽々しく思われます」

と母君は申されるのであつた。おにらみになる父帝の目と視線をお合わせになつたためでか、帝は眼病におかかりになつて重くわずらお煩いになることになつた。御謹慎的な精進を宮中でもあそばすし、太后の宮でもしておいでになつた。また太政大臣が突然亡なくなつた。もう高齢であつたから不思議でもないのであるが、その

ことから不穩な空氣が世上に醸かもされていくことにもなつたし、太后も何ということなしに寝ついておしまいになつて、長く御平癒へいゆのことがない。御衰弱が進んでいくことで帝は御心痛をあそばされた。

「私はやはり源氏の君が犯した罪もないのに、官位を剥奪はくだつされているようなことは、われわれの上に報いてくることだろうと思います。どうしても本官に復させてやらねばなりません」

このことをたびたび帝は太后へ仰せになるのであつた。

「それは世間の非難を招くことですよ。罪を恐れて都を出て行つた人を、三年もたたないでお許しになつては天下の識者が何と言うでしよう」

などとお言いになつて、太后はあくまでも源氏の復職に賛成をあそばさないまま月日がたち、帝と太后の御病氣は依然としておよろしくないのであつた。

明石ではまた秋の浦風の烈しく吹く季節になつて、源氏もしみじみひとりず独棲みの寂しさを感じるようであつた。入道へ娘のことをおりおり言い出す源氏であつた。

「目だたぬようにしてこちらの邸へよこさせてはどうですか」
こんなふうに言つていて、自分から娘の住居へ通つて行くことなどはあるまじいことのように思つていた。女にはまたそうしたことのできない自尊心があつた。田舎の並み並みの家の娘は、仮に来て住んでいる京の人が誘惑すれば、そのまま軽率に情人にも

なつてしまふのであるが、自身の人格が尊重されてかかったことではないのであるから、そのあとで一生物思いをする女になるよ
うなことはいやである。不つりあいの結婚をありがたいことによ
うに思つて、成り立たせようと心配している親たちも、自分が娘
でいる間はいろいろな空想も作れていいわけなのであるが、そう
なつた時から親たちは別なつらい苦しみをするに違いない。源氏
が明石に滞留している間だけ、自分は手紙を書きかわす女として
許されるということがほんとうの幸福である。長い間うわさ噂だけを聞
いていて、いつの日にそうした方を隙見すきみすることができらうら
うと、はるかなことに思つていた方が思いがけなくこの土地へおい
でになつて、隙見ではあつたがお顔を見ることができたし、有名

な琴の音を聞くこともかない、日常の御様子も詳しく聞くことができてゐる、その上自分へお心をお語りになるような手紙も来る。もうこれ以上を自分は望みたくない。こんな田舎に生まれた娘にこれだけの幸いがあったのは確かに果報のあつた自分と思わなければならぬと思つてゐるのであつて、源氏の情人になる夢などは見ていないのである。親たちは長い間祈つたことの事実になろうとする時になつたことを知りながら、結婚をさせて源氏の愛の得られなかつた時はどうだろうと、悲惨な結果も想像されて、どんなりつぱな方であつても、その時は恨めしいことであらうし、悲しいことでもあらう、目に見ることもない仏とか神とかいふものにはかり信頼してゐたが、それは源氏の心持ちも娘の運命も考

えに入れずにしていたことであつたなどと、今になつて二の足が踏まれ、それについてする煩悶はんもんもはなはだしかつた。源氏は、「この秋の季節のうちにお嬢さんの音楽を聞かせてほしいものです。前から期待していたのですから」

などとよく入道に言つていた。入道はそつと婚姻の吉日を曆で調べさせて、まだ心の決まらないように言つている妻を無視して、弟子でしにも言わずに自身でいろいろと仕度したくをしていた。そうして娘のいる家の設備を美しく整えた。十三日の月がはなやかに上つたころに、ただ「あたら夜の」（月と花とを同じくば心知られん人に見せばや）とだけ書いた迎えの手紙を浜の館やかたの源氏の所へ持たせてやつた。風流がちな男であると思ひながら源氏は直衣のうしをきれ

いに着かえて、夜がふけてから出かけた。よい車も用意されてあつたが、目だたせぬために馬で行くのである。惟これみつ光などばかりの一人二人の供をつれただけである。山手の家はやや遠く離れていた。途中の入り江の月夜の景色けしきが美しい。紫の女によおう王が源氏の心に恋しかつた。この馬に乗つたまままで京へ行つてしまいたい気がした。

秋の夜の月毛こまの駒よ我が恋ふる雲井に駈かけれ時の間も見ん

と独ひとりごと言ことが出た。山手の家は林泉の美が浜やしきの邸やしきにまさつていた。浜やしきの館やかたは派手はでに作り、これは幽邃ゆうすいであることを主にしてあ

った。若い女のいる所としてはきわめて寂しい。こんな所にいては人生のことが皆身にしむことに思えるであろうと源氏は恋人に同情した。三昧堂さんまいどうが近くて、そこで鳴らす鐘の音が松風に響き合つて悲しい。岩にはえた松の形が皆よかつた。植え込みの中にはあらゆる秋の虫が集まつて鳴いているのである。源氏は邸内をしばらくあちらこちらと歩いてみた。娘の住居すまいになつてゐる建物はことによく作られてあつた。月のさし込んだ妻戸が少しばかり開かれてある。その縁へ上がつて、源氏は娘へものを言いかけた。これほどには接近して逢おうとは思わなかつた娘であるから、よそよそしくしか答えない。貴族らしく気どる女である。もつとすぐれた身分の女でも今日までこの女に言い送つてあるほどの熱

情を見せれば、皆好意を表するものであると過去の経験から教えられてゐる。この女は現在の自分をあなど侮つて見てゐるのではないかなどと、焦慮の中には、こんなことも源氏は思われた。力で勝つことは初めからの本意でもない、女の心を動かすことができずに帰るのは見苦しいとも思う源氏が追い追いに熱してくる言葉などは、明石の浦でされることが少し場所違いでもつたいなく思われるものであつた。几帳きちょうの紐ひもが動いて触れた時に、十三絃げんの琴の緒おが鳴つた。それによつてさつきまで琴などを弾ひいていた若い女の美しい室内の生活ぶりが想像されて、源氏はますます熱して行く。

「今音が少ししたようですね。琴だけでも私に聞かせてください

ませんか」

とも源氏は言った。

むつ言を語りあはせん人もがなうき世の夢もなかば覚むやと
明けぬ夜にやがてまどへる心には何れを夢と分きて語らん

前のは源氏の歌で、あとのは女の答えたものである。ほのかに
言う様子は伊勢の御息所にそっくり似た人であった。源氏がそ
こへはいつて来ようなどは娘の予期しなかつたことであつたか
ら、それが突然なことでもあつて、娘は立つて近い一つの部屋へ
はいつてしまった。そしてどうしたのか、戸はまたあけられない

ようにしてしまった。源氏はしいてはいろいろとする気にもなつて
いなかった。しかし源氏が躡ちゆうちよ躡ちよしたのはほんの一瞬間のこと
で、結局は行く所まで行つてしまつたわけである。女はやや背が
高く、気けだか高い様子を受け取れる人であつた。源氏自身の内にた
いした衝動も受けていないでこうなつたことも、前生の因縁であ
らうと思うと、そのことで愛が湧わいてくるように思われた。源氏
から見て近まさりのした恋と言つてよいのである。平生は苦しく
ばかり思われる秋の長夜もすぐ明けていく気がした。人に知らせ
たくないと思う心から、誠意のある約束をした源氏は朝にならぬ
うちに歸つた。

その翌日は手紙を送るのに以前よりも人目がはばかられる気も

した。源氏の心の鬼からである。入道のほうでも公然のことにはしたくなくて、結婚の第二日の使いも、そのこととして派手はでに扱あうようなことはしなかつた。こんなことにも娘の自尊心は傷つけられたようである。それ以後時々源氏は通つて行つた。少し道みちの程りのある所でもあつたから、土地の者の目につくことも思つて間を置くのであるが、女のほうではあらかじめ愁うれえていたことが事實になつたように取つて、煩悶はんもんしているのを見ては親の入道も不安になつて、極楽の願ひも忘れたように、仏勤めは怠なまけて、源氏の君の通つて来ることを大事だと考えている。入道からいえば事が成就しているのであるが、その境地で新しく物思ひをしているのが憐あわれであつた。二条の院の女王にょおうにこの噂うわさが伝わつては、

恋愛問題では嫉妬しつとする価値のあることでないとわかっていても、秘密にしておく自分の態度を恨めしがられては苦しくもあり、気恥ずかしくもあると思っていた源氏が紫夫人をどれほど愛しているかはこれだけでも想像することができるのである。女王も源氏を愛することの深いだけ、他の愛人との関係に不快な色を見せたそのおりおりのことを今思い出して、なぜつまらぬことで恨めしい心にさせたかと、取り返したいくらいにそれを後悔している源氏なのである。新しい恋人は得ても女王へ焦こがれている心は慰められるものでもなかったから、平生よりもまた情けのこもった手紙を源氏は京へ書いたのであるが、奥に今度のことを書いた。

私は過去の自分のしたことではあるが、あなたを不快にさせた

つまらぬいろいろな事件を思い出しては胸が苦しくなるのですが、それだのにまたここでよけいな夢を一つ見ました。この告白でどれだけあなたに隔てのない心を持っているかを思ってみてください。「誓ひしことも」（忘れじと誓ひしことをあやまたば三笠^{みかさ}の山の神もことわれ）という歌のように私は信じています。

と書いて、また、
何事も、

しほしほと先^まづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人^{あま}のすさび
なれども

と書き添えた手紙であつた。

京の返事は無邪気な可憐なものであつたが、それも奥に源氏の告白による感想が書かれてあつた。

お言いにならないではいらつしやれないほど現在のお心を占めていきますことをお報しらせくさいます承知いたしました。私には新しい恋人に傾倒していらつしやる御様子が昔のいろいろな場合と思ひ合わせて想像することもできます。

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

おおようではあるがくやしいと思う心も確かにかすめて書かれたものであるのを、源氏は哀れに思った。この手紙を手から離しがたくじつとながめていた。この当座幾日は山手の家へ行く気もしなかった。女は長い途絶えを見て、この予感はずでに初めからあつたことであると歎なげいて、この親子の間では最後には海へ身を投げればよいという言葉が以前によく言われたものであるが、いよいよそうしたいほどつらく思った。年取つた親たちだけをたよりにして、いつ人並みの娘のような幸福が得られるものとも知れなかつた過去は、今に比べて懊おうのう悩の片はしも知らない自分だつた。世の中のことはこんなに苦しいものなのであろうか、恋愛も結婚も処女の時に考えていたより悲しいものであると、女は心に

思いながらも源氏には平静なふうを見せて、不快を買うような言動もしない。源氏の愛は月日とともに深くなつていくのであるが、最愛の夫人が一人京に残つていて、今の女の関係をいろいろに想像すれば恨めしい心が動くことであろうと思われる苦しさから、浜の館やかたのほうで一人寝をする夜のほうが多かつた。

源氏はいろいろに絵を描かいて、その時々的心を文章にしてつけていった。京の人に訴える気持ちで描かいているのである。女王の返辞がこの絵巻から得られる期待で作られているのであつた。感傷的な文学および絵画としてすぐれた作品である。どうして心が通じたのか二条の院の女王もものの身にしむ悲しい時々、同じようにいろいろの絵を描かいていた。そしてそれに自身の生活を日

記のようにして書いていた。この二つの絵巻の内容は興味の多いものに違いない。

春になつたが帝みかどに御惱ごのうがあつて世間も静かでない。当帝の御子は右大臣むすめの女じようきの承香殿じようきようでんの女御にょごの腹に皇子があつた。それはやつとお二つの方であつたから当然東宮みくらいへ御位はお譲りになるのであるが、朝廷の御後見をして政務を総括的に見る人物にだれを決めてよいかと帝はお考えになつた末、源氏の君を不運の中に沈淪ちんりんさせておいて、起用しないことは国家の損失であると思召めして、太后が御反対になつたにもかかわらず赦免ごさたの御沙汰が、源氏へ下ることになつた。去年から太后も物もの怪のけのために病んでおいでになり、そのほか天さとの諭さとしめいたことがしきりに起こるこ

とでもあつたし、祈禱きとうと御精しよじん進しんで一時およろしかつた御眼疾もまたこのごろお悪くばかりなつていくことに心細く思召して、七月二十幾日に再度御沙汰ごさたがあつて、京へ帰ることを源氏は命ぜられた。いずれはそうなることと源氏も期していたのではあるが、無常の人生であるから、それがまたどんな変わったことになるかもしれないと不安がないでもなかつたのに、にわかな宣旨せんじで帰洛きらくのこの決まつたのはうれしいことではあつたが、明石あかしの浦を捨てて出ねばならぬことは相当に源氏を苦しませた。入道も当然であると思ひながらも、胸ふたに蓋ふたがされたほど悲しい気持ちもするのであつたが、源氏が都合よく栄えねば自分のかねての理想は実現されないのであるからと思ひ直した。

その時分は毎夜山手の家へ通う源氏であつた。今年の六月ごろから女は妊娠していた。別離の近づくことによつてあやにくくなと言つてもよいように源氏は女を深く好きになつた。どこまでも恋の苦から離れられない自分なのであろうと源氏は煩悶はんもんしていた。女はもとより思い乱れていた。もつともなことである。思いがけぬ旅に京は捨ててもまた帰る日のないことなどは源氏の思わなかつたことであつた。慰める所がそれにはあつた。今度は幸福な都へ帰るのであつて、この土地との縁はこれで終わると見ねばならないと思うと、源氏は物哀れでならなかつた。侍臣たちにも幸運は分かたれていて、だれもおどる心を持っていた。京の迎えの人たちもその日からすぐに下つて来た者が多数にあつて、それらも

皆人生が楽しくばかり思われるふうであるのに、主人の入道だけは泣いてばかりいた。そして七月が八月になった。色の身にしむ秋の空をながめて、自分は今も昔も恋愛のために絶えない苦を負わされる、思い死にもしなければならぬようにと源氏は思い悶もだえていた。女との関係を知っている者は、

「反感が起こるよ。例のお癖だね」

と言つて、困つたことだと思つていた。源氏が長い間この関係を秘密にしている、人目を紛らして通つていたことが近ごろなつて人々にわかつたのであつたから、

「女からいえば一生の物思いを背負い込んだようなものだ」

とも言つたりした。少納言がよく話していた女であるともその

連中が言っていた時、良清よしきよは少しくやさしかった。

出発が明後日に近づいた夜、いつもよりは早く山手の家へ源氏は出かけた。まだはつきりとは今日までよく見なかった女は、貴き女じよらしい気けだか高い様子が見えて、この身分にふさわしくない端麗さが備わっていた。捨てて行きがたい気がして、源氏はなんらかの形式で京へ迎えようという気になったのであった。そんなふうに言つて女を慰めていた。女からもつくづくと源氏の見られるのも今夜がはじめてであった。長い苦勞のあとは源氏の顔に瘦やせが見えるのであるが、それがまた言いようもなく艶えんであった。あふれるような愛を持って、涙ぐみながら将来の約束を女にする源氏を見ては、これだけの幸福をうければもうこの上を願わないであき

らめることもできるはずであると思われるのであるが、女は源氏が美しければ美しいだけ自身の価値の低さが思われて悲しいのであった。秋風の中で聞く時にことに寂しい波の音がする。塩を焼く煙がうつすり空の前に浮かんでいて、感傷的にならざるをえない風景がそこにはあった。

このたびは立ち別るとも藻塩もしほ焼く煙は同じ方かたになびかん

と源氏が言うと、

かきつめて海人あまの焼く藻もの思ひにも今はかひなき恨みだにせ

じ

とだけ言つて、可憐かれんなふう泣いて泣いて多くは言わないのであるが、源氏に時々答える言葉には情のこまやかさが見えた。源氏が始終聞きたく思つていた琴を今日まで女の弾ひこうとしなかつたことを言つて源氏は恨んだ。

「ではあとであなたに思い出してもらうために私も弾くことにしよう」

と源氏は、京から持つて来た琴を浜の家へ取りにやつて、すぐれたむずかしい曲の一節を弾いた。深夜の澄んだ気の中であつたから、非常に美しく聞こえた。入道は感動して、娘へも促すよう

に自身で十三絃の琴を几帳きちようの中へ差し入れた。女もとめどなく流れる涙に誘われたように、低い音で弾き出した。きわめて上じよう手である。入道の宮の十三絃の技は現今第一であると思うのは、はなやかにきれいな音で、聞く者の心も朗らかになつて、弾き手の美しさも目に髣髴ほうふつと描かれる点などが非常な名手と思われる点である。これはあくまでも澄み切つた芸で、真の音楽として批判すれば一段上の技ぎりよう 倆があるとも言えると、こんなふうには源氏は思つた。源氏のような音楽の天才である人が、はじめて味わう妙味であると思うような手もあつた。飽満するまでには聞かせずにやめてしまったのであるが、源氏はなぜ今日までにしいても弾かせなかつたかと残念でならない。熱情をこめた言葉で源氏はい

ろいろに将来を誓った。

「この琴はまた二人で合わせて弾く日まで形見にあげておきましよう」

と源氏が琴のことを言うと、女は、

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音ねにやかけてしの
ばん

言うともなくこう言うのを、源氏は恨んで、

逢あふまでのかたみに契る中の緒をのしらべはことに変はらざら

なん

と言つたが、なおこの琴の調子が狂わない間に必ず逢おうとも言いなだめていた。信頼はしていても目の前の別れがただただ女には悲しいのである。もつともなことと言わねばならない。

もう出立の朝になつて、しかも迎えの人たちもおおぜい来ている騒ぎの中に、時間と人目を盗んで源氏は女へ書き送つた。

うち捨てて立つても悲しき浦波の名残なごりいかにと思ひやるかな

返事、

年経つる苦屋とまやも荒れてうき波の帰る方にや身をたぐへまし

これは実感そのまま書いただけの歌であるが、手紙をながめて
いる源氏はほろほろと涙をこぼしていた。女の関係を知らない人
々はこんな住居すまいも、一年以上いられて別れて行く時は名残があれ
ほど惜しまれるものなのであろうと単純に同情していた。良清な
どはよほどお気に入った女なのであろうと憎く思った。侍臣たち
は心中のうれしきをおさえて、今日限りに立って行く明石の浦と
の別れに湿っぽい歌を作りもしていたが、それは省いておく。

出立の日の饗きよう応おうを入道はでは派手に設けた。全体の人へ餞せんべつ別

にりっぱな旅装一揃そろいずつを出すこともした。いつの間にこの用意がされたのであるかと驚くばかりであつた。源氏の衣服はもとより質を精選して調製してあつた。幾個かの衣ころもびつ櫃びつが列に加わつて行くことになつているのである。今日着て行く狩衣かりぎぬの一所に女の歌が、

寄る波にたち重ねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん

と書かれてあるのを見つけて、立ちぎわではあつたが源氏は返事を書いた。

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を

というのである。

「せつかくよこしたのだから」

と言いながらそれに着かえた。今まで着ていた衣服は女の所へやつた。思い出させる恋の技巧というものである。自身においての沁しんだ着物がどれだけ有効な物であるかを源氏はよく知っていた。

「もう捨てました世の中ですが、今日のお送りのできませんことだけは残念です」

などと言っている入道が、両手で涙を隠しているのがかわいそ

うであると源氏は思ったが、他の若い人たちの目にはおかしかったに違いない。

「世をうみにここらしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね

子供への申しわけにせめて国境まではお供をさせていただきませ

と入道は言ってから、

「出すぎた申し分でございますが、思い出しておやりくださいませ
す時がございましたら御音信をただかせてくださいませ」

などと頼んだ。悲しそうで目のあたりの赤くなっている源氏の顔が美しかった。

「私には当然の義務であることもあるのですから、決して不人情な者でないとすぐにまたよく思っていたたくような日もあるでしょう。私はただこの家と離れることが名残惜なごりしくてならない、どうすればいいことなんだか」

と言つて、

都出いでし春の歎なげきに劣らめや年ふる浦を別れぬる秋

と涙を袖そでで源氏は拭ぬぐっていた。これを見ると入道は気も遠くな

つたように萎しおれてしまった。それきり起居たちいもよろよるとするふうである。明石の君の心は悲しみに満たされていた。外へは現わすまいとするのであるが、自身の薄はっこう倅であることが悲しみの根本になっていて、捨てて行く恨めしい源氏がまた恋しい面影になつて見えるせつなさは、泣いて僅もかに洩もらすほかはどうしようもない。母の夫人もなだめかねていた。

「どうしてこんなに苦勞の多い結婚をさせたろう。固かたい意い地じな方の言いいなりに私までもがついて行つたのがまちがいだつた」

と夫人は歎たんそく息そくしていた。

「うるさい、これきりにあそばされないことも残っているのだから、お考えがあるに違ちがいない。湯でも飲んでまあ落ち着ちかきなさい。

ああ苦しいことが起こってきた」

入道はこう妻と娘に言ったままで、室の片隅かたすみに寄っていた。妻と乳母めのととが口々に入道を批難した。

「お嬢様を御幸福な方にしてお見上げしたいと、どんなに長い間祈つて来たことでしょう。いよいよそれが実現されますことかと存じておりましたのに、お気の毒な御経験をあそばすことになったのでございますね。最初の御結婚で」

こう言つて歎なげく人たちもかわいそうに思われて、そんなこと、こんなことで入道の心は前よりずっとぼけていった。昼は終日寝ているかと思うと、夜は起き出して行く。

「数珠じゆずの置き所も知れなくしてしまった」

と両手を擦り合わせて絶望的な歎息たんそくをしているのであった。

弟子でしたちに批難ひなんされては月夜つきよに出て御堂みどうの行ぎよう道どうをするが池いけに

落ちてしまう。風流ふうりゆうに作った庭ていの岩角いわかどに腰こしをおろしそこねて怪け

我がをした時には、その痛みのある間まだけ煩悶はんもんをせずにいた。

源氏げんじは浪速なにわに船ふねを着けて、そこで祓はらいをした。住吉すみよしの神かみへも

無事むじに帰洛きらくの日の来きた報告ほうこくをして、幾いくつかの願がんをを実行じっぎんしようと思

う意志いしのあることも使つかいに言いわせた。自身みづかみは参詣さんけいしなかつた。

途中ちゆうちゆうの見物けんぶつなどもせずにすぐに京きやうへはいったのであつた。

二条にじょうの院いんへ着きいた一行いっけいの人ひと々と京きやうにいた人ひと々は夢心地ゆめごちちで逢あひ、

夢心地ゆめごちちで話わが取りとりかわされた。喜び泣なきの声こゑも騒さわがしい二条にじょうの院いん

であつた。紫夫人むらさきふじんも生きがいなく思おもつていた命いのちが、今日けふまであつ

て、源氏を迎ええたことに満足したことであろうと思われる。美しかつた人のさらに完成された姿を二年半の時間のうちに源氏は見ることができたのである。寂しく暮らした間に、あまりに多かつた髪の量の少し減つたまでもがこの人をより美しく思わせた。こうしてこの人と永久に住む家へ歸つて來ることができたのであると、源氏の心の落ち着いたのととも、またも別離を悲しんだ明石の女がかわいそうに思いやられた。源氏は恋愛の苦にどこまでもつきまとわれる人のようである。源氏は夫人に明石の君のことを話した。女王はどう感じたか、恨みを言うともなしに「身をば思はず」（忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな）などとはかなそうに言っているのを、美しいとも可憐かれんで

あるとも源氏は思った。見ても見ても見飽かぬこの人と別れ別れにいるようなことは何がさせたかと思うと今さらまた恨めしかった。

間もなく源氏は本官に復した上、権大納言ごんだいなごんも兼ねる辞令を得た。侍臣たちの官位もそれぞれ元にかえされたのである。枯れた木に春の芽が出たようなめでたいことである。

お召しがあつて源氏は参内した。お常御殿に上がると、源氏のさらに美しくなつた姿をあれて田舎住まいいなかを長くしておいでになつたのかと人は驚いた。前代から宮中に奉仕していて、年を取つた女房などは、悲しがつて今さらまた泣き騒いでいた。帝みかども源氏にお逢いになるのを晴れがましく思おぼしめ召されて、お身なりなどを

ことにきれいにあそばしてお出ましになった。ずっと御病気で
ありになったために、衰弱が御見えになるのであるが、昨今にな
って陛下の御気分はおよろしかった。しめやかにお話をあそばす
うちに夜になった。十五夜の月の美しく静かなもとで昔をお忍び
になって帝はお心をしめらせておいでになった。お心細い御様子
である。

「音楽をやらせることも近ごろはない。あなたの琴の音もずいぶ
ん長く聞かなんだね」

と仰せられた時、

わたつみに沈みうらぶれひるの子の足立たざりし年は経にけ

り

と源氏が申し上げると、帝は兄君らしい憐あわれみと、君主としての過失をみずからお認めになる情を優しくお見せになつて、

宮ばしらめぐり逢ひける時しあれば別れし春の恨み残すな

と仰せられた。艶えんな御様子であつた。

源氏は院の御おんため為に法華経ほけきょうの八講を行なう準備をさせていた。

東宮にお目にかかる、ずつとお身大きくなつておいでになつて、珍しい源氏の出仕をお喜びになるのを、限りもなくおかわい

そうに源氏は思った。学問もよくおできになつて、御位みくらいにおつきになつてもさしつかえはないと思われるほど御聡明そうめいであることがうかがわれた。少し日がたつて気の落ち着いたところに御訪問した入道の宮でも、感慨無量な御会談があつたはずである。

源氏は明石から送つて来た使いに手紙を持たせて歸した。夫人にはばかりながらこまやかな情を女に書き送つたのである。

毎夜毎夜悲しく思つているのですか、

歎きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

こんな内容であつた。

大弐だいにの娘ごせちの五節は、一人でしていた心の苦も解消したように喜んで、どこからとも言わせない使いを出して、二条の院へ歌を置かせた。

須磨の浦に心を寄せし船人のやがて朽くたせる袖そでを見せばや

字は以前よりずっと上手じょうずになっているが、五節に違いないと源氏は思つて返事を送つた。

かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残なごりに袖の乾ひがたかりしを

源氏はずいぶん好きであつた女であるから、誘いかけた手紙を見ては訪ねたい気がしきりにするのであるが、当分は不謹慎なこともできないように思われた。はなちるさと花散里などへも手紙を送るだけで、逢いには行こうとしないのであつたから、かえつて京に源氏のいなかつたころよりも寂しく思つていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2003年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

明石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>